

#### (4) 対英米開戦

「近世日本政治思想における「自然」と「作為」——制度観の対立としての」が連載されているさなかの1941(昭和16)年12月、日本は英米との戦争に突入する。開戦の日、師の南原繁は沈痛な顔をして瞑目したまま静かに、「このまま枢軸〔日本やドイツ〕が勝ったら世界の文化はお終いです」と言った。動転していた丸山の心は、この一言で治まったという。多くの人々が時流に迎合していくことに失望していた丸山にとって、自己の立場を固守した南原の存在は大きな支えとなっていた。

やがて戦況が思わしくなくなってくると、南原は高木八尺や田中耕太郎(画像)ら他の東大法学部教授とともに終戦工作を試みた。これは、破滅的な結果が予想される本土決戦を避け、なるべく犠牲を伴わない形で戦争を終わらせようとするものであり、皇族を総理大臣に据えて事態を収拾することも模索されていた。丸山は南原からあらかじめこの工作の構想を聞かされている。東大法学部スタッフの間では、日本の敗戦は必至であることが共通認識となっていたのである。

